極覚

社研だより

第100号

令和８年３月

発　行　京都市小学校
教育研究会社会科部会

責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
當　麻　章　英

今年度を振り返って

京都市小学校社会科教育研究会 副会長
吉祥院小学校 校長　　森　美知子

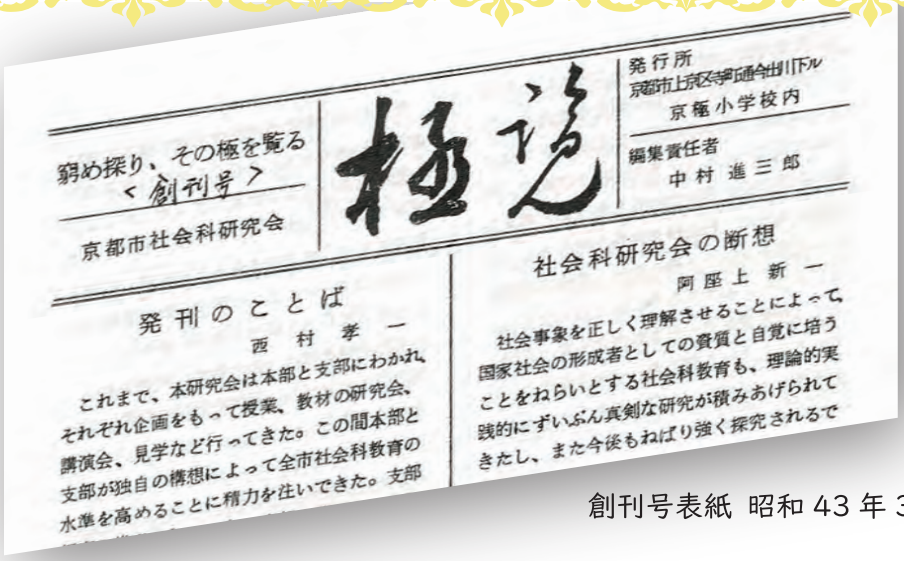
令和７年度も残すところわずかとなり、令和８年の全国小学校社会科教育研究協議会京都大会が目前に迫ってきました。今年度はその京都大会に向けて、研究部から提案された、「＃子どもが調べ考える社会科学習　～「今」を見て「先」を見通し　自他に問い続けていく子どもの育成を目指して～」の研究主題のもと、各学年部会から例年より多い数の授業実践が行われてきました。

主体的な学びの充実を図るための、「３つの矢（学習問題の設定・見通しの充実・調べる学習の充実）」が示され、各学年部が具体的な方策を考え取組を進めてきました。「3 つの矢」を大切にして授業を構築することは、子ども自身が学習問題を見出し、その解決に向けて自分で見通しをもって調べ、そして、調べたことをもとに友だちと話し合い考えを深めていく、という学習過程を充実させることです。この学習過程は、「個別最適な学び」「協働的な学び」そのものです。私たち京都社研が、長年大切にしてきた、子どもが主体的に進める社会科学習は、時代が変わっても何も変わらないのだと実感させられます。しかし、大きく変わってきていることもあります。一人一台のタブレットを活用することで、調べ方やまとめ方、意見交流の仕方など、これまでとは違った学習の様子が見られるようになりました。１時間の学習の中で、子どもがタブレットに向き合い調べ進める。黙って調べ続ける姿に驚かされることもあります。しかし、子ども自身の中で問題意識がなければ、調べ続けることはできません。黙々と調べ続けるそんな姿も主体的な学びの姿なのです。また、調べたことや考えたことをアプリを使えば、簡単にクラス全体で共有することができます。それをもとに、考えを広げたり深めたりすることができるのです。今の子どもたちにとって、自分で見つけた学習問題を多面的・多角的にとらえ学びを深めるためには、新しい学習ツールとしてのＩＣＴの活用は、必要不可欠なものとなっています。

昨年９月には、次期学習指導要領の改訂に向けた「論点整理」が公表されました。その中に、「自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手の育成」のために、『「好き」を育み、「得意」を伸ばす』ということが示されています。京都大会の研究主題のもと、授業づくりを進めることで、まずは研究会員や会場校の先生方が、社会科を「面白い」「好き」と感じてほしいと思います。そんな思いが詰まった授業が実践できれば、子ども達の社会科への「好き」という思いを育むことができると思います。それが、社会科の大きな目標でもある民主的な社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の育成にもつながるのだと考えます。

大きな時代の変化の中で新しいことを活用しながら、私たち京都社研は、子どもの主体的な学びを本質を変えることなく追い続けています。新しい学習ツールや手法を使いこなし、主体的に生き生きと社会科を学ぶ子どもたちの姿を、京都大会で全国の皆様に見て頂けるよう、研究会員一丸となって実践を重ねていきたいと考えています。引き続き、皆様のご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

祝　極覧　第100号


弱め探り、その極を覧る
＜創刊号＞
京都市社会科研究会

極覧

発行所
京都市上京区寺通今出川下ル
京極小学校内
編集責任者
中村進三郎

発刊のことば
西村孝一
これまで、本研究会は本部と支部にわかれ、それぞれ企画をもって授業、教材の研究会、講演会、見学など行ってきた。この間本部と支部が独自の構想によって全市社会科教育の水準を高めることに精力を注いできた。支部

社会科研究会の断想
阿座上新一
社会事象を正しく理解させることによって、国家社会の形成者としての資質と自覚に培うことをねらいとする社会科教育も、理論的実践的にずいぶん真剣な研究が積みあげられてきたし、また今後もねばり強く探究されるで

創刊号表紙 昭和43年3月

「極覧　社研だより」が昭和 43 年 3 月に創刊されてから５７年がたち、本号で 100 号となりました。京都市小学校社会科教育研究会は 1947 年（昭和 22 年）に学制（六・三・三制）の施行とともに社会科が発足し、それと同時に創設されました。それから 21 年後の「極覧」創刊となります。

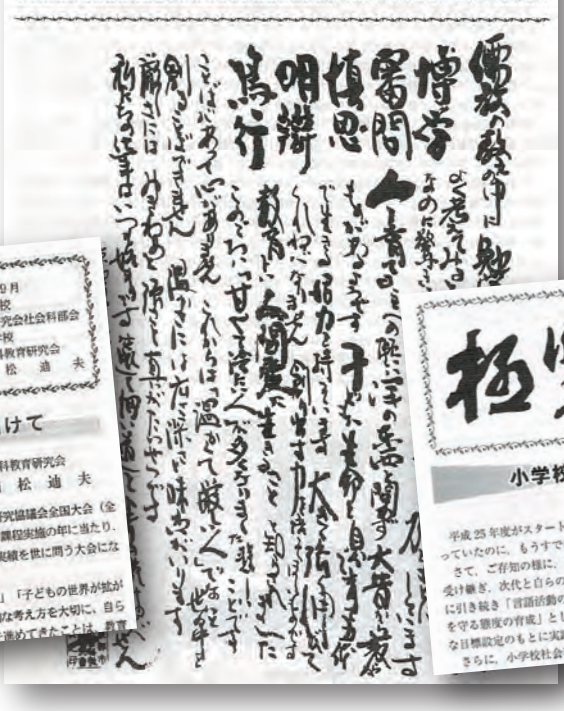
当時の「極覧」は 1 年生か 6 年生まで（当時は低学年も生活科ではなく社会科）の研究報告や副会長、研究部長の随想などが掲載され 12 ページで構成されていました。

創刊号から 100 号までを振り返ってみると、語り続けられてきたのは「子どもが主体」の社会科学習をどのように実現するかということです。研究の真ん中に常に子どもを置き、生き生きと輝く子どもの姿をどのように実現していくのか、57 年間語り続けられきた歴史が 100 号の中につづられています。

京都社研で目指している「子どもが調べ考える社会科学習」、子どもが主体の社会科学習は、社研の歴史の中で常に追い求められていた志です。これまでの諸先輩方の実践や社会科に対する思いを極覧100 号の歴史を振り返る中で改めて感じ、受け継いでいくことの大切さを痛感しています。

同じ志をもつ諸先輩方の思いを子どもの姿で実現できるよう、これからも社会科授業実践研究を進めていきたいと考えます。

極覧
社研だより
第25号
昭和53年12月
発行　京都市教育研究会社会科部会
京都市社会科教育研究会
責任者　清水安



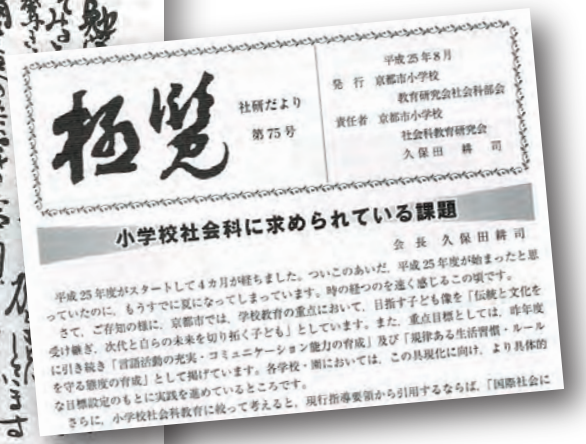
極覧
社研だより
第50号
平成10年9月
発行　京都市小学校
教育研究会社会科部会
責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
植松迪夫

平成14年全小社研京都大会に向けて

京都市小学校社会科教育研究会
会長　植松迪夫

平成14年には、近畿社研第49回京都大会と同時に全国小学校社会科研究協議会全国大会（全小社研）を初めて京都市で開催することになった。それは折しも新教育課程実施の年に当たり、新教育課程の内容の十分な理解と、今まで積み上げてきた京都社研の実績を世に問う大会になることであろう。

大会以後の研究主題に「子どもがすすめる」「子どもが生きる」「子どもの世界が拡がる」「子どもの心がはずむ」社会科学習に取り組み、子どもの個性的な考え方を大切に、自ら問題意識をもち、本質を追求していく力を育てる問題解決的な学習を進めてきたことは、教育


極覧
社研だより
第75号
平成25年8月
発行　京都市小学校
教育研究会社会科部会
責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
久保田耕司

小学校社会科に求められている課題

会長　久保田耕司

平成25年度がスタートして4カ月が経ちました。ついこのあいだ、平成25年度が始まったと思っていたのに、もうすでに夏になってしまっています。時の経つのを速く感じるこの頃です。

さて、ご存知の様に、京都市では、学校教育の重点において、目指す子ども像を「伝統と文化を受け継ぎ、次代と自らの未来を切り拓く子ども」としています。また、重点目標としては、昨年度に引き続き「言語活動の充実・コミュニケーション能力の育成」及び「規律ある生活習慣・ルールを守る態度の育成」として掲げています。各学校・園においては、この具現化に向け、より具体的な目標設定のもとに実践を進めているところです。

さらに、小学校社会科教育に絞って考えると、現行指導要領から引用するならば、「国際社会に

極覧 100 号発刊に寄せて

創刊号から学ぶ

極覧会　会長　　砂田　信夫

社研だより『極覧』が 100 号を迎えました。おめでとうございます。

創刊は、1968 年（昭和 43 年）3 月。創刊号には、当時の西村孝一会長の “発刊のことば”、塔本俊三副会長の “極覧” など、熱情あふれる寄稿がみられます。

改めて読み直してみました。『温故知新』のつもりで、皆さんにもお伝えします。

1. “紐帯（ちゅうたい）” の風土を大切にする

創刊は、研究会発足から約 20 年後。創刊のきっかけは、この年度の秋、研究会に初めて各「学年部会」が設置され、これまで研究会活動を牽引してきた研究会「本部」と新たに誕生した各「学年部会」との意思疎通や協働の重要性が、一気に高まったからです。

では、円滑な研究会活動を目指すには、どうすればよいのか、何が必要なのか……。創刊号に「紐帯として、この機関紙を発刊した」（寄稿 “発刊のことば” より）とあります。“紐帯” とは、二つのものを結びつける役割をなしているもの、という意。類義語には、“絆”、“連帯”、“信頼” などがあり、人間関係における人と人のつながり、結びつきを意味しています。

創刊以来、『極覧』は “紐帯” として会員相互の研究実践を広め、その士気を高める役割を担ってきました。結果、研究会には、困難な課題に直面したときも打たれ強く、組織一丸となって立ち向かう風土が醸成されてきました。自力で解決しようとするその姿勢は大切で、尊重すべきです。しかし、研究会は組織体。一人の会員、一つの部会や学校だけで解決しようと悩むことなく、これからも組織として解決に取り組むことが重要です。

活動のあらゆる場で“紐帯”の風土を大切にしてほしい、と思っています。（「♬～人は石垣　人は城～」と、社研・極覧会の愛唱歌「武田節」のごとく……）

2. “窮探極覧（きゅうたんきょくらん）” の姿勢で授業に臨む

研究会が求め続ける社会科授業の具現化はどうすればよいのか……。創刊号に「毎日の授業を通しそのあるべき姿を窮(きわ)め探(さぐ)り、その極(きわみ)を覧(み)る気魄(きはく)と努力と叡知に俟(ま)つほかはない」（寄稿“極覧”より）とあります。続けて「一寸の妥協も同情も許さない厳しい中でこそ……（略）……本当の社会科が実施されるのではないか」と。創刊号は『極覧』と命名されました。授業に臨む先輩方の熱い願いや思いが、強く表れている題字です。

“窮探究極” で授業に臨む姿勢は、かなり以前から研究会には浸透していました。何度か研究授業を参観したり、実際にさせていただいたりしましたが、当時も大変厳しく指導助言される先輩方がたくさんおられたのを思い出します。お褒めの言葉はほとんどありません。悔し涙とともに育てていただきました。

“教師は授業で勝負せよ” と言われています。一時間ごとの教師の努力や工夫は、地道ながらも、目指す子ども主体で分かりやすく楽しい授業を具現化します。これからも、日々 “窮探究極” で姿 勢で授業に臨み、ぜひ京都大会の研究主題「# 子どもが調べ考える社会科学習」を全国に発信してほしい、と願っています。

結びに。私たち極覧会は社研の「応援団」です。日々、力戦奮闘されている皆さんを全力で支援させていただきます。當麻章英会長のもと、この先、開催の日まで全力で悔いなく邁進してください。

３年部会

地域の人々の営みから学びを深め、自分と地域とのつながりを考える子ども

３年部会では、地域の様子や人々の姿を通して学ぶことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにすることをテーマに、今年度の研究を進めてきた。また、研究構想の具現化のため、３年生という子どもたちの実態に合わせながら、「子どもが調べ考える社会科学習」の実現を目指してきた。

このような考えのもと学年部会を行い、部員とともに授業づくりを行ってきた。そして、３つの単元を通して授業研究会を行い、研究主題に迫るとともに、研鑽を重ねることができた。

以下、その一端を報告する。

【本年度の授業実践】
①「工場でつくられるもの」
柊野小学校　麻生 和希　教諭（９月）
②「商店のはたらき」
大塚小学校　嶺 温奈　教諭（11 月）
③「安全なくらしを守る」
久世西小学校　兼山 柚紀　教諭（２月）

実践①　「工場でつくられるもの」

●単元の学習問題
美十ではどのようにして生八つ橋と京ばあむをたくさんつくっているのだろう。

「工場でつくられるもの」では、地域の工場でつくられている生八つ橋と京ばあむを観察し、気付いたことや疑問に思ったことを出し合う活動を通して学習問題をつくる活動を設定した。

「生八つ橋の皮はもちもちしていて、片手でめくれないほど柔らかいよ。」や、「京ばあむは生地がふわふわしていていいにおいだったよ。」などの気付きから、単元の学習問題を設定した。

単元の学習問題に対する予想を立て、それらを問い化する活動を行った。出てきた予想を分類することで、「調べる学習」につながる見通しをもつことができたと考える。

分類よって出てきた視点は「原材料の仕入れ先」「生産工程」「働く人の様子」「生産の工夫」であったため、単元の学習問題の設定や提示資料、指導者の問掛け等が適切であったと感じている。

実践②　「商店のはたらき」

●単元の学習問題
なぜたくさんの大塚地域の人がマツヤスーパーに行くのだろう。

「商店のはたらき」では、「なぜたくさんの大塚地域の人がマツヤスーパーに行くのだろう」という単元の学習問題について調べる学習を行った。学習計画をもとに、協働的に調べる姿が見られた。

マツヤスーパーがお客さんに来てもらうためにしていることや、マツヤスーパーに行くお客さんがどのような願いをもっているのか等について、個に応じた興味や考えに沿って調べる学習を展開することができた。調べる過程においては、主体性を核とした調べる時間を設定し、個に応じた支援によって、調べる学習の質を高めることを意識して取り組んだ。

両単元とも、子どもの問題意識を高め、子どもが主体的に取り組める単元の学習問題を設定することができた。そして、問いについて予想し、問い化を図ることで、調べる学習の充実にもつながった。

以上の実践を通して、３年部会のテーマである「地域の人々の営みから学びを深め、自分と地域とのつながりを考える」ということに迫ることができた。次年度も引き続き、「子どもが調べ考える社会科学習」のよりよい姿に迫ることができるよう、自他に問い続けていく姿の育成を目指して研究を進めていきたい。

（文責　大藪小　川合 翔子）

4 年部会

自分たちのくらしを支える人々のおもいや願いについて学びを深めることで、地域社会に対する誇りと愛情をもち、地域社会と自分とのつながりを考える子ども

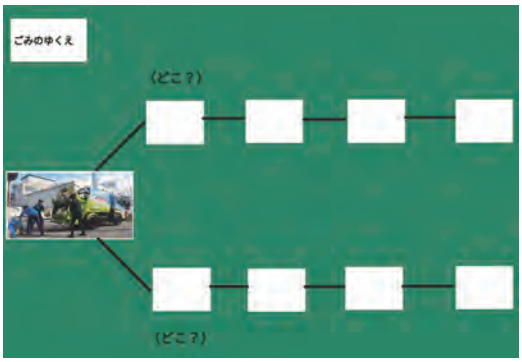
本年度４年部会では、研究主題にあるように「子どもが調べ考える社会科学習」とするためにはどのような単元構成とすればよいのか、どのような子どもたちの姿が調べ進めているのかということを話し合いながら進めていった。以下、実際の実践について詳しく述べる。

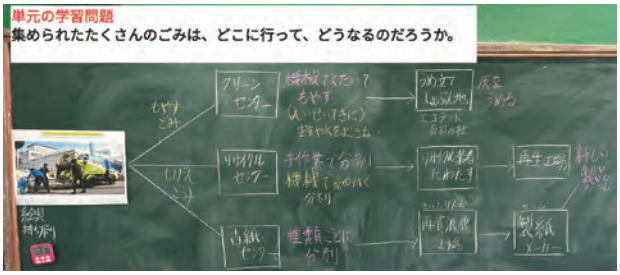
壱の矢：学習問題の設定

【昔から続く京都府の祭り～祇園祭～】では、子どもたちに身近な祇園祭や山鉾巡行について知ることで、祇園祭は約１１５０年、山鉾巡行は約７００年前からあるとういうことや、多くのお金と人が必要だということ、準備も大変だという事実を知ることで、「とても大変なのに、なぜ山鉾巡行は約７００年も続けられているだろうか。」という充実した見通しにつながる学習問題が設定できた。

弐の矢：見通しの充実

【くらしとごみ】では、学習問題に対して「ごみマップ」を使って予想をした。地域のごみ捨て場にあったごみがその後どのようにして処理されていくのか時系列で予想をすることに繋がった。また、調べたことを同じ「ごみマップ」にまとめていくことで子ども同士の交流がしやすくなった。





参の矢：調べる学習の充実

１子どもたちの主体性を核とした調べる時間の設定

【古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市】では、「宇治市ではお茶の生産量が少ないのになぜお茶に関するものがたくさんあるのだろう」という学習問題を問い化し、「どのような歴史があるのだろうか。」「どのような環境でつくっているのだろうか。」「どのような作り方をしているのだろうか。」「どうやってたくさんの人に飲んでもらうようにしているのだろうか。」といった問いを設定することができた。このうち歴史と環境については一斉学習を進めた。その後、作り方と広め方を個々に調べていくことで、人に焦点を当てながら調べることが出来、単元のまとめで人々の協力関係やまちづくりに気付くことができるようにした。

２　調べた事実をもとに意味を考える場面の設定

【外国の都市とさまざまな国際交流をしている舞鶴市】では、単元全体を振り返り、これまでの学習から、多くの学国の方が訪れる京都市で暮らす自分たちは、どのように外国の人たちと交流していけばよいのかを考えることができるようにした。多くの都市と交流を続ける理由から、国際交流の意味を考える。

【本年度の授業実践】
①「くらしとごみ」
大塚小学校　　勝部 順也　教諭
②「昔から続く京都府の祭り ～祇園祭～」
洛央小学校　　山田 健太郎 教諭
③「古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市」
池田東小学校　片山　拓　教諭
④「外国の都市とさまざまな国際交流をしている舞鶴市」
桃山東小学校　外園 善基　教諭

（文責　久世西小　仙波 俊輔）

5 年部会

社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども

【本年度の授業実践】
①「米づくりのさかんな地域」
西院小学校　松木 貫太　教諭
鷹峯小学校　坂元 翼　教諭
②「自動車をつくる工業」
大塚小学校　山﨑 文音　教諭
美豆小学校　大本 勇介　教諭
③「わたしたちの生活と森林」
大宮小学校　上地 侑樹　教諭（2 月末）
朱八小学校　福本 光莉　教諭（3 月上旬）

西院小　松木 貫太 教諭の実践について

松木教諭の授業実践では、壱の矢「学習問題の設定」、弐の矢「見通しの充実」として、子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する工夫や、予想から見通しを持たせる工夫を図った。本単元【米づくりのさかんな地域】においては、まず庄内平野の地形や気候の特徴を理解したあと、庄内平野の場所を地図を用いて確認した。さらに、庄内平野でとれるお米の実物を 3 種類提示した。そこで「なぜ遠く離れた山形のお米が京都に届けられるのか」という疑問が生まれた。また、食味ランキングを提示し、山形県のお米が特 A ランクの評価を連続で取り続けていることを捉えることで、「なぜ、わたしたちは庄内平野の特 A ランクのお米を食べることができるのだろう」という学習問題が設定できた。子どもたちからの“なぜ？”といった問題意識を大切にした学習問題となった。学習問題の予想では、作り方・人の関わり方・届け方などについて考え、それらを調べれば学習問題の解決につながるという見通しをもつことができた。また、予想が次々と挙げられ、問い化する流れへと導くことができた。このように、子どもたち自らが学習の主体者となり、主体的に取り組む実践となった。

鷹峯小　坂元 翼 教諭の実践について

坂元教諭の授業実践では、参の矢「調べる学習の充実」として、子どもたちが自ら資料を選び、活用できる環境づくりの工夫を図った。本単元【米づくりのさかんな地域】においては、調べたことを自分なりにまとめる活動を行った。子どもたちは常に学習問題を意識し、どの工夫が学習問題の解決につながるのかという問題意識をもちながら進めることができた。また、子どもたちが自ら資料を選び、それらを使えるようにする工夫として、調べたことを共通のワークシートに書き込んだり、共有のボードにまとめたりした。その結果、子どもたち同士で学習問題の解決に必要な事実を話し合ったり、足りていない情報を伝え合ったりすることで、自己調整しながら調べを進めていく姿が見られた。調べの過程からまとめの過程においては、一人一人が考えた学習問題の解決につながるキーワードを持ち寄り、学習問題の答えについて話し合った。みんなで学習問題の答えを話し合うことを通して、米づくりに関わる人々の工夫や努力といった社会的事象の概念理解を図ることができた。

大塚小　山﨑 文音 教諭の実践について

山﨑教諭の授業実践では、壱の矢「学習問題の設定」として、子どもたちが主体的に取り組める問いを設定する工夫を図った。本単元【自動車をつくる工業】では、世界にある自動車の種類の多さがわかる資料を提示し、世界にはたくさんの自動車があることを確認した。そのうえで、世界の自動車売上ランキングを提示し、世界には多くの自動車があるにもかかわらず、日本車が連続で 1 位になっているという驚きから問題意識をもつことができ、「なぜ日本の自動車は世界中でたくさん売れているのだろう」という学習問題を設定することができた。

美豆小　大本 勇介 教諭の実践について

大本教諭の実践では、参の矢「調べる学習の充実」として、単元【自動車をつくる工業】における調べる学習の充実を図った。本実践では、調べる学習の中で中間交流の時間をとり、自分が調べて分かったことや、まだ調べきれていないことを明確にし、自己調整を図れるようにした。その際、子どもたちは共通のワークシートを用いて話し合いを行い、話し合いで新たに気付いたことや自分たちの考えを書き足していけるように活動した。そして、まだ不十分な調べについては次時で調べていくという見通しをもち、学習問題の解決に向けて主体的に取り組む実践となった。

（文責　待鳳小　成宮 未希子）

6年部会

社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども

６年部会では､研究部の主題設定を基に､政治歴史･国際社会について学んだことを自分とつなげて考える社会科授業を目指していった。また、教員としても学び続ける存在であるために、ニーズに合わせた勉強会を設定していった。今年度は昨年度よりも早く活動を始め、５月より６年部会を設定し、毎月１回以上のペースで実施できた。部会の際は新たに入会された先生方の授業作り･学級経営に関する相談会を実施し、次単元の教材検討や同和単元の指導法などを気さくに話し合いつつ、授業実践を行った。

【本年度の授業実践】
①「天皇中心の国づくり」
久世西小学校　山下 将輝　教諭（７月２日）
②「戦国の世から天下統一へ」
洛央小学校　藤田 湧登　教諭(10月21日)
③「世界に歩み出した日本」
下鴨小学校　内藤 和哉　教諭(12月19日)
④「世界の未来と日本の役割」
葵小学校　松本 雪穂　教諭（３月２日）

① 久世西小・山下実践「天皇中心の国づくり」

第１時で聖徳太子について調べるとともに、太子でも天皇中心とまでは至らなかった事実に触れる。しかし、約 100 年後には、大仏を作るほど天皇の力が強まったことを知り、「聖徳太子がなくなったのになぜ、天皇中心の国づくりにすることができたのだろう。」として、「なぜ」で単元を貫く問いを設定することができた。また、子どもたちそれぞれが、図を使って説明したり、個別に指導者が用意した資料を読み込んだりして､熱心に調べることができていた。

② 洛央小・藤田実践「戦国の世から天下統一へ」

第１時で戦国大名が分国法等で各地を支配して長く戦乱の世が続いていたことをおさえた。しかし、信長・秀吉の登場で急速に天下統一が進んだことを知り、「戦乱の世の中でなぜ信長と秀吉は天下統一を進めることができたのだろう。」という学習問題を導き出し､子どもたちは自発的に学習に向かえた。また、「政策」「領地」「海外とのつながり」という３つの条件を整理した作業プリントを用意し、子どもたちの調べている状況を確認しながら、適宜個別の声かけをしたり、コメントを加えたりして指導に活かしていけた。

③ 下鴨小・内藤実践「世界に歩み出した日本」

第１時で「世界から認められていなかったのに、なぜ日本は世界の五大国の１つになれたのだろう。」という学習問題を設定した。そこから､「他国との争い」｢産業の発展｣｢人々の活躍｣という条件を予想し、調べ学習に各々で進むことができた。また、「江戸幕府と政治の安定」の単元末にて、幕府の政策を評価するという活動を行ったが、その流れ・つながりを活かし、「世界に歩み出した日本」の単元でも当時の日本の取組を評価するという学習活動を計画した。子どもたちからも評価活動をやりたいという意見が出て、実際の学習活動につなげることができた。

④ 葵小・松本実践「世界の未来と日本の役割」

前単元「日本とつながりの深い国々」で日本と関わりの深い国を調べた。一方、本単元導入では、それ以外の国を取り上げ、それらの国々が日本に感謝している事実に出会うことで､「なぜ、いろいろな国の人たちから、日本は感謝されているのだろう」という学習問題を設定して調べていく学習を展開できた。

以上のように、６年部会が歴史・国際単元において討議を重ねてきた「なぜ」を問う問いの設定を積極的に心がけることで、それぞれが調べ進める単元構成を目指していけた。一方で、単元終末は、これまでの時間で得た知識の発表・羅列で収束しがちである。自分の考えを友達と交流する中で、いかに整理していくことができるか、また単元の学習問題とは別に考えが深まる問いを設定できるか、議論を続けたい。

（文責　洛央小　石原 一繁）

「先」へつながる「今」の実践

来年度に全国大会を控え、今年度、各校・各学年部会等で、様々な熱い実践が行われました。「調べ考える」学習の充実を目指し、日々実践を積み重ねてくださったことに、心より感謝申し上げます。

先日、春日野小学校で研究集会がありました。教室や廊下にはこれまでの学習の足跡が、そして授業では、実践を積み重ねてきた子どもたちが主体的に学ぶ姿が見られました。その様子から、全国大会を見据え、目の前の子どもたちと向き合い、実践を重ねてこられた先生方の気概を強く感じました。

研究主題にある「調べ考える」学習の充実を目指し、私自身も実践に取組みました。しかし、初めから研究提案しているような実践はできませんでした。子どもたちもどのように学んだらよいか、イメージできないからです。しかし、目指す学びを少しずつ具体化していくことで、社会科の学習に対し子どもたちはどんどん主体的に取組み、「調べ考える」ようになっていきました。１年間学びを積み重ねた結果、「調べ考える学習」を子どもたち自身で行うようになり、社会科の問題解決的な学習の充実、その一端を実現できたのではないかと考えています。

子どもたちが社会科の学び方を知ることで、問題解決的な学習は充実します。そして、教師もどのように子どもが学べばいいのかを理解し、その学びの実現を図ることができれば、社会科の学びの充実は誰もが実現できることにつながります。そう考えた時、今実践を深めている研究は、京都社研が大切にしてきた理念の「伝統」と「革新」の一つの姿であると考えます。「伝統」として「問題解決的な学習の充実」が、「革新」として「誰でもできる社会科学習」が、今の研究実践で体現されてきていると感じます。春日野小学校での研究集会は、まさにその体現だったのではないかと考えます。

「今」京都社研が取組んでいる実践は、これから「先」、社会科学習でより一層その充実が求められます。「『今』を見て『先』を見通し」、全国に先駆けた実践、その充実を図りたいと思います。

（文責　研究部 部長　加藤 俊介）

伝統技術にふれた「子ども体験教室」京扇子を作ってみよう！

今年度の子ども体験教室「京扇子を作ってみよう！～プロの方々に教えてもらって、自分のオリジナル扇子を作ってみよう～」は、令和７年 11 月29日(土)に京都市総合教育センター４Fの永松ホールで実施しました。今年度も講師として京都扇子団扇商工協同組合青年部の皆さん 6 名をお招きし、ご指導をいただきました。

右の画像は、子ども達が自分の折地に扇骨を差し込もうとしている時の様子です。折地に扇骨を差し込む前に地吹きという工程を行います。地吹きの折地への空気入れ、そこから扇骨を上手に差し込むのは簡単そうで難しく、地道な作業に苦戦する子ども達の姿も見られました。困っている子には職人さんが丁寧に声掛けをしてくださいました。職人さんが一瞬で完成させる姿に、これまで培ってきた技術に驚きを示す様子が見られました。

また右の画像は、扇子の完成を待つ間、職人さんから京扇子についての歴史や由来を聞く様子です。自分達で体験したからこそ、子ども達はもっと伝統的な扇子について知りたいと、学びを深める姿が見られました。最後の職人さんへの質問時間には、扇子作りの歴史について多く職人さんに聞く姿が見られました。伝統文化に触れることができました。

枠内は、子ども達の感想から抜粋したものです。

- 扇子は日本にしかないと思っていたけれど、いろいろと広がっていって使われ、いろいろな歴史があることが分かりました。
- 扇骨を紙に入れるのがとても難しかったです。この作業を何回もしている職人さんの働きに驚きました。
- 頑張って作った扇子をこれからも大切に使っていきたいです。

京都の伝統産業に触れることで、子ども達が暮らす京都という郷土やその歴史を大切に感じる一助となることを願っています。

（実践講座委員　佐々木 翔史）